こけしと天理

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

東京神田の天理ギャラリーにおいて本年２月22日（土）から４月４日（土）まで天理ギャラリー第169回展として「こけしⅡ－遠刈田と土湯、中ノ沢－」が開催される。天理ギャラリーは、ゴールデンウィーク頃に天理図書館、秋と春先に天理参考館が館蔵品を展示する施設で、入館無料となっている。東日本の人々にも両館に収蔵されている稀覯書や貴重な資料の数々を観覧していただきたいという趣旨から1962年に開設された。東日本大震災から９年を迎える今年の展示担当者として、古来豊かな文化を育んできた東北地方、この美しい地域の復興を祈念して私はこけしを取りあげた。これに関連して、天理に関係の深いこけしとその作者を紹介したい。

今でも家の中を見渡せば１本ぐらいこけしをお持ちの家庭も多いのではないだろうか。国民的番組となった「おしん」でも銀山温泉で母に買ってもらった古びたこけしが序盤に登場して、その後の展開の伏線となっている。こけしは豊かな森林資源を有する東北地方を代表する木の郷土玩具である。その起源は諸説あるが、江戸時代に木地師が湯治場のみやげものに作ったのが始まりではないかと言われている。丸い頭と円柱形の胴のみという簡潔な形状だが、東北六県に分布する産地毎に伝統的な約束事があり、それぞれ個性的だ。その個性を、産地特有の、師弟間で継承されてきた技法のつながりごとに分けて「系統」と称する。その系統のうち、2008年に開催した天理ギャラリー第133回展「こけし」では、ともに宮城県の鳴子系こけしと弥治郎系こけしを紹介した。今回「こけしⅡ」と題したのは「第２弾」の意味を込めている。

前置きが長くなったが、今回紹介したいのは福島県土湯温泉で作られた土湯系こけし（図１）である。こけし製作者を「工人」と呼び習わすが、このこけしは阿部治助工人（以下、治助と称する）の手による。治助は明治18年、土湯温泉で木地業を営む家に生まれた。３男６女の第５子で、口数少なく真面目な性格だったと伝わる。大正元年に結婚して３人の子どもにも恵まれたが、妻を含めいずれも自分より早く亡くなるという不幸に襲われた。土湯は災害の多い土地で、会津と江戸を結ぶ交通の要衝として往古より栄えたのにもかかわらず、古いこけしや文書が失われている。天明の飢饉、たび重なる水害や大火、戊辰戦争による村の焼失などに土湯の人々は堪え忍んだ。治助はもともと日蓮宗徒だったが、家族の不幸や川の氾濫による水害が重なって天理教を信心するようになった。熱心な信仰で有名で、昭和２年の土湯の大火で治助の家が全焼したとき、燃え盛る家の中で「南無天理王命」とひたすら唱えているところを間一髪救い出されたという。そのころ、こけしが脚光を浴びようになり、熱心なこけし蒐集家が東北各地を回るようになるが、治助にとってはそれも禍となった。別の工人が作った個性的なこけしが治助作と誤って伝わり、さらに「阿部治助の化けて出そうな薄穢い怪奇魅力」と武井武雄が『日本郷土玩具 東の部』（昭和５年刊 地平社書房）の「福島県」「土湯のこけし」項で紹介したため、不運にもその評価が固まってしまった。今日のようなメディアも少なく、実際に作品を目にする機会も限られた時代のことである。先駆的なこけし研究家であった深沢要でさえ「阿部治助の不健康な表情のこけし」（『こけしの微笑』昭和13年刊 昭森社）と切り捨て、巷の「下手の治助」など散々な酷評にも治助は堪えた。抗弁せず、無愛想で寡黙な人柄が誤解を増幅させたのかもしれない。図１の通り、治助のこけしは決して「薄穢」くも、「不健康」でもない。その後、「薄穢い」と冷淡だった武井は治助のこけしを実際に見て、「阿部治助の真作を見るに及んでは、（土湯の）覇権は治助への感、筆者は頻りなるものがあります」と評価を一変させている。昭和17年になると「現在の土湯こけし中最も素朴優雅なもの」（菊楓会同人編『古計志加々美』昭和17年刊）とようやく正当な評価を得られるようになったが、そのころには治助はこけしを存分に作れない身体になっていた。竹久夢二は治助のこけしを気に入り、昭和７年から８年にかけてのヨーロッパ旅行にも持参した。非凡な表現者として相通じるものがあったのかもしれない。今日でも愛好者が多く、「１本選ぶとしたら治助のこけし」と賞せられ、評価は高い。

図１：遠くを見つめるような表情の治助のこけし。高さ 25.2cm

図２は一人息子金一のこけし。昭和16年結婚後、署名したこけしを蒐集家に送るようになったので、そのころのこけしと思われる。治助よりいたずらっぽい表情で愛らしい。治助を継ぐ工人として将来を嘱望されながら昭和20年に肺結核のため世を去った。27歳で亡くなったため、こけしは多く残っていない。治助の悲しみはいかばかりであったろう。しかし、不幸なことばかりではない。はじめにこけしは「産地特有の、師弟間で継承」と述べたが、親子で引き継がれる例は案外少ない。阿部家は、治助、金一、敏道、国敏工人へと血脈をつないでいる。今回は、現在の土湯こけし工人組合長でもある国敏工人に会期中こけし製作実演をお願いした。天理ギャラリーに陳列された祖父、曾祖父のこけしの前で木地を挽く姿に、治助もそのこけしに似た微笑を浮かべることだろう。

図２：茶目っ気のある表情の金一のこけし。治助の墨ろくろ線より重く、波線が軽やかではない点で両者を見分ける。高さ 22.5cm

阿部国敏工人

〈図はすべて天理参考館蔵品〉